

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02511

研究課題名(和文)現代北米先住民文学における部族性と普遍性の考察

研究課題名(英文)A Contemplation on the Tribal and the Universal in Contemporary Native North American Literature

研究代表者

余田 真也(Yoden, Shinya)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：20277750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北米先住民のオジブウェ(アニシナベ)という部族に帰属する三人の現代作家ジェラルド・ヴィゼナー、ルイズ・アードリック、デヴィッド・トロイヤーの文学実践の意義を考察するものである。各作家と部族社会との関係を検証し、著作における部族的/地域的な様相を探求する一方で、他の先住民作家との関係を検証しつつ、作品における普遍的/審美的な特性を探求した。そうした探求を通して、部族的なものや普遍的なものとの媒介者として三人の先住民作家を定位した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果については、アメリカ学会、日本アメリカ文学会東京支部、および日本英文学会関東支部といった主要学会でのシンポジウムにおいて報告し、学会誌、研究紀要、および研究論文集において刊行した。三人の現代オジブウェ(アニシナベ)作家に焦点を当て、部族性と普遍性を切り結ぶその文学実践の意義に迫った本研究には先駆性があり、その成果は先住民文学研究の基盤の充実ならびに各作家の研究の進展に寄与するものと評価できる。

研究成果の概要(英文)：This study contemplates on the significance of the literary practices of three contemporary Ojibwe (Anishinaabe) authors, Gerald Vizenor, Louise Erdrich, and David Treuer. Examining their relations to the indigenous communities, on the one hand, I inquired into the tribal/local aspects of their writings. On the other, examining their relations to other native authors, I investigated the universal/aesthetic features concerning their works. Throughout these investigations, I evaluated these native authors as literary mediators between the tribal and the universal.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：先住民文学 オジブウェ(アニシナベ) ジェラルド・ヴィゼナー ルイズ・アードリック デヴィッド・トロイヤー 部族性 普遍性 文学様式

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 北米先住民文学の研究は、1960年代末以降の先住民作家の台頭、ネイティブ・アメリカン・スタディーズの進展、ポストコロニアリズムやエスニック・スタディーズといった領域横断的な批評研究の趨勢などとも絡みながら徐々に勢いを増し、1990年代以降に本格化し、現在も隆盛が続いている。その過程で、先住民の多様性を不可視化するステレオタイプな文化表象への批判、先住民文学の重層性や横断性の析出と称揚、先住民文化の自律性を標榜するネイティブ・アメリカン・ナショナリズムなどが耳目を集めてきたが、先住民作家の文学と非先住民作家の先住民表象との関係についての研究は十分とはいえなかった。そこで申請者は、博士論文『赤と白と黒の遠近法』(2011年)ならびに単著『アメリカ・インディアン・文学地図』(2012年)において、19世紀末から20世紀のアメリカ文学を主な対象にして、先住民による文学と先住民に関する文学における先住民表象の様相を探索し、先住民作家と白人作家と黒人作家の関係性を読み解きながら、オルタナティブな文学史を提示した。

(2) 従来、先住民文学研究の文脈では、作家の部族アイデンティティと文学実践のあいだに共振関係を想定することは自然であり、そうした連関こそが先住民文学の前提条件とされてきた感がある。もちろんそのような想定は決して間違っていないが、必ずしもすべての先住民作家にあてはまるわけではない。申請者は前掲書においてその点について考察し、作家のアイデンティティと文学実践との関係にはかなりの偏差があることを例証した。しかしながら、そうした議論は主としてマイノリティとしての先住民の文学という見地からおこなっており、部族社会との関係における作家の文筆活動の意義についての検証は十分ではなかった。本研究は拙著において検証が十分でなかったこうした論題について、三人の現代先住民作家の文学実践を主な対象にして、部族性/地域性および普遍性/審美性の観点からその意義を探求するものである。

2. 研究の目的

(1) 北米先住民文学において、作家の部族アイデンティティにはいかなる意味があるのか。先住民文学の本質は部族性にこそあるという見解が存在するが、そうであるならば、部族民と部外者を分断するのではなく、非部族民や非先住民への回路を開く契機として「部族性」を想定することはできるのか。そうした問いに答えるために、本研究では「先住民」や「インディアン」よりも細かい区分である「部族」に踏みこみ、作家の文学実践と部族社会との関係を俎上にのせる。ただし、広大な領域に分布する多彩極まる先住諸部族と作家との関係を網羅することは不可能であるため、本研究では主たる研究対象を先住部族のオジブウェ(アニシナベ)に帰属する三人の現代作家、ジェラルド・ヴィゼナー(Gerald Vizenor, 1934-)、ルイーザ・アードリック(Louise Erdrich, 1954-)、デヴィッド・トロイヤー(David Treuer, 1970-)を中心に研究を進める。

(2) ヴィゼナーとアードリックはそれぞれ「先住民ルネサンス」の作家としてすでに先住民文学史における確固たる地位を築いている。両者とも現在にいたるまで旺盛な文筆活動を継続しており、北米英語圏ばかりでなく世界の先住民文学研究において不可欠な作家である。また1995年に小説家としてデビューしたトロイヤーは、フィクションとノンフィクションの両分野でコンスタントに話題作を発表し、注目を集めている。この三人はいずれもオジブウェとヨーロッパ系移民との混血の家系の出身で、中西部(ミネソタ州やノースダコタ州)で育ち、所属するバンドの保留地やオジブウェの親族とのつながりを持っている。本研究では、彼/彼女らが文学実践において部族的なものにどのように関わっているのかを考察する。

(3) 北米先住民文学の研究は、部族性や地域性に特化した先住民ナショナリズムの探求と、普遍性や審美性に開かれた文学様式の探求へと展開しているが、それらは分断傾向にある。どちらの方向性も不可欠だが、それらを効果的に接合すること、作家によってそれらがいかに接合されているのかを検証することも必要ではないだろうか。本研究では、三人のオジブウェ作家が部族的な主題を、いかに普遍的な様式に接合しているのかを考察する。さらに、他の先住民作家との比較検証を通して、彼/彼女らの文学実践の意義を相対的な布置に描き出す。

3. 研究の方法

(1) 基本的な作業として、先述の三人のオジブウェ作家の著作を読み、作家および作品に関する先行研究や、先住民の社会・歴史・文化に関する先行研究の収集や整序を行い、それらのデータを元にして各作家の文学実践と部族社会との関係を検証する。彼らの文学実践を評価するにあたって、とくに留意すべきは最新の動向なので、本研究では彼らが刊行した著作のなかでも比較的新しい作品に焦点を当てる。ヴィゼナーについては、彼が部族憲法の制定に関与してから上梓したノンフィクションや小説、アードリックについては、特に文壇の評価の高い近年の小説「正義三部作」、トロイヤーについては、先住民文学をめぐる評論集、保留地をめぐるノンフィクション、および近作の小説を主な研究対象とする。

(2) 三人のオジブウェ作家および著作との関連が明らかな場所(主にミネソタ州とノースダコタ州)を訪問し、保留地の教育機関や文化施設や史跡などの視察、資料の閲覧や収集、部族の伝統行事の見学、作家の縁者や地域の住民から作家や部族にかかわる聞きとりをおこない、そこで獲得する知見を、各作家の文学実践と部族社会との関係の考量に役立てる。

(3) 三人のオジブウェ作家が部族的な主題をいかに普遍的な物語へと成形しているのかを検証する。その過程で、各作家の創作方法や物語作法に注目し、他の先住民作家との比較も交えながら、その文学実践の普遍的/審美的な意義を導き出す。

4. 研究成果

(1) 概況：本研究では三人の現代オジブウェ（アニシナベ）作家が文学実践において部族性と普遍性をいかに調停しているのかを考察した。主な研究対象が今世紀の著作だったため、先行研究が比較的少ないなかで展開することになったが、オジブウェという共通項を定めていたので、相互参照によってある程度は補うことが可能であり、また研究対象に関係のある場所への現地視察を採り入れたので、文学実践の背景となる事柄を具体的に確認することができた。公表した研究成果には、いずれも先駆性が備わっていると評価できる。本邦において、先住民文学研究への関心度は決して高いとはいえないが、アメリカ文学研究においては不可欠な領域であり、特に本研究は先住民作家のなかでもっとも重要なヴィゼナーとアードリック、もっとも注目すべきトロイヤーに関する研究であり、その成果の需要は少なくないと予想できる。

(2) ヴィゼナーと部族社会：ミネソタ州のオジブウェ族のホワイトアース・バンドに帰属するヴィゼナーは、幼少期にオジブウェの父を亡くし、白人の母親にネグレクトされながらも、父方の親族の影響でオジブウェの伝承に関心を抱いて育ち、作家になる前にはソーシャル・ワーカーやジャーナリストとして主に都市の先住民の生活や地位の向上に尽力し、また文筆活動においてはオジブウェの歴史や社会や文化に関する著作を出版し、祖先や親族を含む部族民の経験についても記している。また近年には彼が帰属するホワイトアース・ネーションの憲法制定にも深く関与した。ヴィゼナーは著作において部族の主権や自治を支持し、部族的な価値観の存続を描き続ける一方で、部族社会の伝統を担う守旧派の排他性に批判的である。それは都市在住の混血であるヴィゼナーが、部族の伝統派からは部外者のように見られていることと裏腹の関係にある。彼は保留地で生育したわけでも、オジブウェ語に堪能なわけでも、部族政治に関与してきたわけでもない。2007年にホワイトアース憲法会議委員に任命され、2009年には憲法主筆の役割を果たしたにもかかわらず、彼の役割に対して疑問を呈する部族民もいた。また新憲法は住民投票で可決されたが、伝統派の反対により部族議会での議論が紛糾して頓挫したために履行されていない。その憲法自体は、現代先住民の部族自治における先駆的な試みとして他部族からも肯定的に評価されており、ヴィゼナー自身も、先住民らしい「存続や摂理や自由」の感覚に根ざした比類なき民主憲法として評価している。彼が特にこだわったのは、部族の古来の習慣 彼の先祖も被った「保留地からの追放」を禁止する条項を加えることだった。

(3) ヴィゼナーの文学実践：ホワイトアース憲法への関与を経て、ヴィゼナーは二冊の関連小説『ホワイトアースの骸布』(Shrouds of White Earth, 2010)と『条約シャツ』(Treaty Shirts, 2016)を上梓した。『ホワイトアースの骸布』では、偏狭な守旧派の部族民に保留地から追いだされた前衛芸術家が、同類の作家(ヴィゼナー)とのインタビューを通じて、二人が「幻想的で国際性ゆたかな先住民の未開趣味」(コスモプリミティヴィズム)を実践して、先住民の存続(サバイバンス)の物語を提供していることを確認しあう。またヴィゼナーの孫世代の部族民を主人公とする近未来小説『条約シャツ』では、連邦政府の唐突な政策変更に伴って派遣された知事によって保留地から追放された7人の先住民が、ホワイトアース憲法を携えて、守旧派の影響力が及ばない場所に移住して、自由で平和な国家を築こうとする。またヴィゼナーはノンフィクションにおいて彼自身の家系を遡り、彼が生まれる前の保留地の部族社会や、部族民としての親族の経験を書き残しているが、彼の祖父世代の親族による第一次大戦の経験に着想を得た小説『青い大鴉』(Blue Raven, 2014)でも、従軍を経て芸術家となった主人公の双子兄弟が、理不尽な役人の支配する窮屈な保留地から離脱して、「血縁や地縁に縛られない世界規模のつながり」を表すトーテムが実現する「コスモトーテム」な場所を幻視している。

(4) ヴィゼナー研究の成果：公表した一本目の論文では、まず部族国家ホワイトアースの憲法が履行されなかった経緯を詳らかにしながら、現代オジブウェ部族社会が抱える問題の一端を明らかにし、さらに小説『ホワイトアースの骸布』と『条約シャツ』を分析の俎上に載せた。これらの作品において、ヴィゼナーは体制の維持に固執する伝統信奉者や、近代欧米の価値観を押しつける連邦政府を辛辣に批判する一方で、ホワイトアースから追放されたオジブウェの芸術家や文筆家たちが、部族社会の外部へと越境し、部族性に根ざしつつも普遍的な価値へと開かれた創作に従事していることを讃えている。保留地から離れたエグザイルの芸術活動に部族社会のサバイバンスを幻視するヴィゼナーの創作を、部族社会の歪みを象徴的に解消しようとする「コスモプリミティヴ」なふるまいと解釈した。二本目は論文では、20世紀の最初の4半世紀を時代背景とする小説『青い大鴉』を分析の俎上に載せた。本作においてヴィゼナーは祖父世代の双子兄弟の半生 保留地での生活、第一次世界大戦への出征、パリでの画家/作家としての成功を通じて、保留地と外部(都市や戦場)を関係づけながら、エグザイルの芸術家・文筆家となった彼らが、国家や文化を越えた場所で実践するオジブウェの文化伝統に根ざしたモダニズムを讃えている。部族性と普遍性が混淆した「ネイティヴ・モダニズム」の出現を言祝ぐこの作品を、部族社会に「コスモトーテム」のヴィジョンをもたらす企てと解釈した。

(5) アードリックと部族社会：ノースダコタ州のオジブウェの支族タートルマウンテン・チペワ・バンドに帰属するアードリックは、同州ウォピトンのインディアン学校の教員だったオジブウェの母とドイツ系の父の第一子として生まれ、両親の自由な教育方針の元で育ち、芸術的な才能を開花させた。母方の祖父母や親族は保留地に暮らしており、部族議長も務めた祖父をはじめとする親族との交流はアードリックの文学実践の靈感源だった。アードリック自身は、保留地での生活経験こそないものの、作家になってからも、オジブウェ語の習得に努め、部族民としての自らの系譜をたどり直し、部族社会とのつながりを保とうとしている。またミネアポリスに独立

系書店を所有して先住民関連の書籍を販売したり、詩人の妹(Heid Erdrich)とともに基金を設立して先住民の作家や学者の仕事を支援したり、オジブウェ語の本を出す小出版社を設立したりして、本を通じて先住民社会および地域社会にも貢献している。

(6) アードリックの文学実践：デビュー小説『ラヴ・メディシン』(Love Medicine, 1984)以降、タートルマウンテン保留地を虚構化した架空の保留地リトル・ノー・ホースと故郷ウオピトン虚構化した架空の町アーガスを舞台にして、多様な人物が多声的な語りによって複雑に絡み合う物語を断続的に書きついできた。リトル・ノー・ホース・サガは、2005年の作品で終了しているが、それ以外の作品でも題材に最適な物語様式の探求を継続している。本研究ではそれらの連作やノンフィクションなども参照しながら、特に文壇の評価の高い近年の三作品『鳩害』(The Plague of Doves, 2008)、『ラウンドハウス』(The Round House, 2012)、『ラローズ』(LaRose, 2016)を俎上に載せた。「正義三部作」と呼ばれるこれらの作品も、保留地と近郊の町が主な舞台として設定されているが、町の名はブルートーで、作中人物もそれ以前とは異なっている。三部作のそれぞれの作品の中心には異なる事件があり、事件をめぐる異なる「正義」が達成される。加えてそれぞれの作品は異なる物語様式によって提示されている。アニス・フィールド図書賞に輝き、ピューリッツァ賞最終候補になった『鳩害』では、20世紀初頭に発生した二つの殺人事件をめぐる物語が、複合的な一人称の語りで展開され、リンチ殺人の誘因となった人物や白人一家殺害事件の真犯人が明らかになる一方で、それぞれは間接的に報いを受ける。全米図書賞に輝いた『ラウンドハウス』では、オジブウェ女性のレイプ事件と殺人事件が起こり、その容疑者が浮かびあがるが、司法の限界のために正当な裁きが下されない。それを知ったレイプ被害者の息子(13歳の少年)が、邪悪な容疑者を秘密裏に裁き、大人になった彼自身が全編を一人称で回想している。アードリックに二度目の全米批評家協会賞の栄誉をもたらした『ラローズ』は、全編三人称の語りで、オジブウェ男性が図らずも犯した不運な事故(白人少年の死亡)をめぐる贖いや癒しの役割を幼いオジブウェ少年ラローズが担う物語を伝えている。

(7) アードリック研究の成果：公表した一つ目の論文では、オジブウェ一家と白人一家の間に起きた悲劇の贖いと癒しをオジブウェの子供が媒介する『ラローズ』において、アードリックが社会正義の成就と部族伝統を担う子供の役割とをいかに関連づけているのかを検証した。先住民であるなしにかかわらず万人が理解しうる経験と、先住民に固有の経験をちりばめたこの小説では、霊力を持つ聖なる子供の媒介が社会に調和をもたらしているが、自らラローズの系譜の子孫を任じ、4人の娘の母でもあるアードリックだからこそ子供の聖性に信頼をよせることができたと解釈した。公表した二つ目の研究成果は、『鳩害』の物語作法に焦点を当てたものである。19世紀末にノースダコタで起きた白人農家一家殺人事件と先住民リンチ事件を虚構化して中心にすえ、架空の共同体における数世代の人間関係を複層的に紡ぐこの作品において、アードリックが語りの信憑性をどのように主題化し、先住民に対する不正の物語をいかに調停しているのかを検証し、複合的な語りの様式によって白人と先住民、犯罪者と被害者、正義と不正が分かちがたく結びついた共同体のリアリティを浮き彫りにしながら、偶然のかたちで因果応報の哲理を刻みつけていると結論づけた。この研究成果は英文学会関東支部のシンポジウム「エスニシティとナラティブのポリティックス 信頼できない語りを中心に」で報告し、さらにその発表原稿に加筆補正を施して論文として刊行した。なお、小説『ラウンドハウス』に関する考察は公表した成果には十分に含めきれなかったので今後の継続課題としたい。

(8) トロイヤーと部族社会：ミネソタ州のオジブウェ族のリーチレイク・バンドに帰属する気鋭の現代作家トロイヤーは、生まれこそ首都ワシントンだが、7歳から高校卒業まではリーチレイク保留地で育った。母親はオジブウェ女性として初めての部族裁判所判事を務めた人物である。プリンストン大学に進学し、92年に文化人類学と創作の学位を取得し、99年にミシガン大学で文化人類学の博士号を取得した俊英で、ミネソタ大学とウィスコンシン大学を経て、2010年からロサンゼルスに移住してサザン・カリフォルニア大学の教授として創作と文学を教えている。勤務先の都市部で作家としての活動を行いながら、リーチレイク保留地で部族伝統を守る活動をしているというが、著作においてその二つは完全に分断されているわけではない。歴史学者の兄アントン・トロイヤー(Anton Treuer)が主導する部族社会でのオジブウェ語の調査収集や普及活動に協力しながら部族社会との紐帯を保つ一方で、作家としては保留地や部族社会との関係を反映した作品を書き、流暢なオジブウェ語を作品の要所で使用している。

(9) トロイヤーの文学実践：架空の保留地の住人たちの物語を複合的な語りで描いたデビュー小説『リトル』(Little, 1995)と、兄弟殺害の罪を償って出所した青年を軸に都市先住民の哀しい現実を描いた第二作『ハイアワサ号』(The Hiawatha, 1999)で頭角を現していたトロイヤーは、メタフィクションの体裁で書いた第三作『アペレス博士の翻訳』(The Translation of Dr. Apelles, 2006)と、挑発的な評論集『ネイティブ・アメリカン・フィクション』(Native American Fiction, 2006)で、もっとも注目すべき先住民作家に躍り出る。『ネイティブ・アメリカン・フィクション』では、従来の先住民文学研究において、作品評価の基準が作家の部族性や先住民性に偏りすぎて、審美性(文学の様式)についての議論がなおざりになっている傾向を手厳しく批判する一方で、非先住民作家ばかりでなく著名な先住民作家の作品を俎上に載せて、口承伝統に関する誤解や歪曲を焙りだし、真正な先住民文化への憧憬を読みとる。評論集において披瀝した美意識を作品化したような小説『アペレス博士の翻訳』は、親族や保留地から遠く離れた東部の都市で文書館に勤めながら、プライベートでアルゴンキン系の部族語の伝承を翻訳する主人公アペレスの愛の物語と、彼が翻訳している愛の物語という二層からなる。口承伝統の再利用とい

う意匠を備えた先住民文学の典型例にも見えるが、実はアペレスが翻訳している物語の内容は、古代ギリシャ作家のパストラル・ロマンスを下敷きにして先住民の物語に書き替えたものである。トロイヤーは先住民文学の最大の特徴といわれる口承伝統の再利用の方法にひねりを加えるとともに、口承伝統を先住民文学の源泉に位置づける定説の不確かさにも照射している。ノンフィクション『保留地生活』(Rez Life, 2012)は、家族や彼自身に関する回想と保留地に関する記事からなり、銃乱射事件以後のレッドレイク保留地、政府の先住民政策、先住民の部族自治、部族政府の身鼻頂などについてインタビューを交えて綴る。第四小説『ブルーデンス』(Prudence, 2015)は、アーネスト・ヘミングウェイの伝記やニック・アダムズの物語に登場するオジブウェの少女をひとつの発想源にした作品である。第二次世界大戦時、保留地にある白人一家の別荘を主な舞台に、その住人や使用人の物語と人間関係を描くこの小説には、トロイヤーの視点から書き替えたブルーデンスの物語ばかりでなく、戦時中にリーチレイクに実在した捕虜収容所からの脱走兵の物語、白人男性と先住民男性の同性愛の物語、ナチスの残党狩りをおこなうユダヤ人の物語が絡む。大著『ウーンデッドニーの鼓動』(The Heartbeat of Wounded Knee, 2019)は、1万年前から21世紀までの先住民の歴史を先住民の視点からまとめあげた労作である。

(10) トロイヤー研究の成果：公表した論文では、評論集『ネイティヴ・アメリカン・フィクション』の議論の要諦をまとめ、小説『アペレス博士の翻訳』において、部族語を英語に翻訳する都市のオジブウェ言語学者の物語と、欧米の古典文学を部族の物語にリサイクルした物語の内容を検証しながら、口承伝統と翻訳者の関係を複層的に脱構築し、物語のリサイクルと作家のアイデンティティという主題に分け入るトロイヤーの審美的な達成を明らかにした。ただし、小説『ブルーデンス』を対象とした研究は、後に述べるように、当初想定外だった研究を先に進めたため、期間内に成果を刊行できていない。今後の継続課題としたい。

(11) 現代先住民文学の研究：先住民作家は多様にして真実味のある先住民を作品で提示し、非先住民読者に正しい先住民理解を促しつつ、先住民読者に矜持と展望を抱かせようとしてきた。その役割は21世紀になっても変わっていない。ヴィゼナーによれば、先住民の先祖も記憶も物語も持たない、いわばシミュレーションにすぎない「インディアン」とは異なり、「ポストインディアン」はインディアンの紋切型を払拭しつつ同時代を生き延びる先住民である。つまり、ポストインディアンは「ポストレイシャル」ともいわれる現代においても残存している先住民への差別や偏見に抗いながら先住民アイデンティティの保持や刷新に寄与するのである。本研究では「ポストインディアン」とよぶる現代先住民作家の著作やメディアでの言説を整理し、三人のオジブウェ作家を軸に有機的に関係づけようとした。

(12) 現代先住民文学研究の成果：上記の研究の一部は、2016年度アメリカ学会年次大会において招請を受けた「ポストレイシャル アメリカにおける人種」という「部会」(シンポジウム)において報告した。ヴィゼナー以後のポストインディアン作家といえるトマス・キング(Thomas King)やアードリック、その次の世代のシャーマン・アレクシー(Sherman Alexie)やトロイヤーらが提起する人種がらみの諸問題 白人による先住民差別、保留地における白人の犯罪、先住民へのなりすまし、保留地をめぐる先住民と周辺住民との軋轢などを俎上に載せながら、今日の北米に残存する先住民性の搾取や蔓延するレイシズムの実情を確認し、現代の先住民や部族社会が抱える諸課題の把握に務めた。この発表は本研究課題の準備的なものである。当初は三名のオジブウェ作家に関する個別の研究を進捗させてから、他の先住民作家も交えながら総論としてまとめる計画だったが、個別の作家の研究が当初の見込みよりも遅れたため、期間内には文章化できなかった。今後の継続課題としたい。

(13) 現代先住民文学の想定外の研究と成果：本研究の開始当初においては想定外だった研究を通じて、ひとつの方向性を示す成果を残すこともできた。本研究期間中の2017年は、アメリカにおける最初期の文化的混血であるポカホンタスの没後400周年にあたり、それに関連して企画された日本アメリカ文学会東京支部のシンポジウムに登壇する機会を得た。この企画において、申請者はポカホンタス・ナラティブが先住民からどのように見られているのかという論題を担当し、ラゲーナ族に帰属する先住民作家ポーラ・ガン・アレン(Paula Gunn Allen)が先住民の立場から書いた伝記『ポカホンタス』(Pocahontas, 2003)を俎上に載せた。伝記というよりも虚構に近い語りで紡がれたこの著作において、作者アレンは欧米の偏見が産出してきたポカホンタスのイメージを覆すべく、彼女が部族を代表する聖職者(メディスンウーマン)で、しかも新世界と旧世界(先住民と白人)を切り結ぶ密偵/仲介者/外交官でもあったという大胆な仮説を提唱した。欧米人のポカホンタス伝説の核になるジョン・スミスの「助命」の真偽を論証する際に、アレンはポカホンタスが属していたパウアタン部族連合とオジブウェ族が同じアルゴンキン語族であるという事実を根拠にして、スミスが誤読したパウアタンの儀式をオジブウェの創世神話に照らして解釈している。ポカホンタスも作者のアレンもオジブウェとは無関係だが、アレンはポカホンタスの部族性をオジブウェの口承伝統(アルゴンキンの文化圏)のなかに再配置し、汎部族的な文脈から再解釈しようとしている。同様にアレンはトランスアトランティックな文化関係の黎明期を生きた先住民女性として、新世界と旧世界のあいだで密偵、仲介者、外交官の役割を果たしたポカホンタスを、部族的なものや普遍的なものを媒介する人物としても定位している。アレンのポカホンタスへの評価は、本研究課題におけるオジブウェ作家に通じる評価であり、これは研究開始当初には想定外だった研究成果である。本研究発表の後、同学会誌への招請に応じて発表原稿を加筆補正した論文を寄稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 余田真也	4. 巻 44
2. 論文標題 聖なる子供 ルイズ・アードリックの『ラローズ』における媒介と継承	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 白山英米文学（東洋大学文学部紀要英米文学科篇）	6. 最初と最後の頁 15-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 余田真也	4. 巻 43
2. 論文標題 物語の再利用と自己の再創造 デヴィッド・トロイヤーの『アベレス博士の翻訳』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 白山英米文学（東洋大学文学部紀要英米文学科篇）	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 余田真也	4. 巻 79
2. 論文標題 現代先住民作家ポーラ・ガン・アレンのポカホンタス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アメリカ文学（日本アメリカ文学会東京支部会報）	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 余田真也	4. 巻 25
2. 論文標題 ジェラルド・ヴィゼナーのコスモトーマチック・ヴィジョン 『青い大鴉』における保留地、世界大戦、前衛芸術	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アメリカ文学評論（筑波大学アメリカ文学会）	6. 最初と最後の頁 195-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 余田真也	4. 巻 45
2. 論文標題 複合的な一人称の語りと物語の信憑性 ルイーズ・アードリックの『鳩害』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白山英米文学（東洋大学文学部紀要英米文学科篇）	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 余田真也
2. 発表標題 現代先住民作家ポーラ・ガン・アレンのポカホンタス
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部12月シンポジウム「ポカホンタスの400年 環大西洋文学史を再考する」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 余田真也
2. 発表標題 ポストインディアンの真正性 現代先住民文学におけるアイデンティティの考察
3. 学会等名 アメリカ学会第50回年次大会部会D「ポストレイシャル アメリカにおける 人種」（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 余田真也
2. 発表標題 ルイーズ・アードリックの創作法と部族性 The Plague of Dovesを軸に
3. 学会等名 日本英文学会関東支部第17回大会シンポジウム「エスニシティとナラティブのポリティクス 信頼できない語りを中心に」（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 余田真也「オジブウェの 法 とエグザイルの 生 ジェラルド・ヴィゼナーの『ホワイトアースの骸布』と『条約シャツ』」	4. 発行年 2017年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 346
3. 書名 越川芳明・杉浦悦子・鷺津浩子編『 法 と 生 から見るアメリカ文学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----